

現代日本語動詞活用論

大 木 一 夫

1 はじめに

現代日本語の活用について、現代日本語文法研究を先導した寺村秀夫は次のようにいう。⁽¹⁾

- (1) 文語文法の既成の概念から離れ、現代の日本語の活用のさまを虚心に見てそれを形の上で整理しようとするならば、その結果には大きな差がないはずである。
(『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』41頁)

これは、きわめて広く知られる学校文法流の活用整理——文語文法の枠を維持した形をもつ——の呪縛を離れて、現代日本語の活用を整理するとすれば、その整理の結果に大きな差が出てくることはないといっているようにみえる。たしかに、現在、学校文法流の枠組を現代日本語の分析として全面的かつ積極的に支持するということはないと思われるし、諸家の活用分析には、さまざまな点で共通する側面がみられることからすれば、寺村の述べていることは、一往、肯うべきところがあるように思われる。しかしながら、その一方で、現実としては、分析結果に見過ごすことができないくらいの差異があるというのがほんところであろう。そうなると、この寺村の述べていることは誤っているということになるのであろうか。

実は、寺村が(1)でいうところは、単に「活用を整理するとき、その結果に大きな差はない」といつているのではないと思われる。では、寺村のこの発言はどのようなところに鍵があるのだろうか。ここでは、このような点を考えながら、現代日本語動詞の活用について、それがどのように記述されるのか、ということを考えていく。あるいは、このような視座をもって現代日本語動詞形態

論をすすめていくことにする。

2 これまでの動詞活用論

では、これまでの動詞活用論はどのようなものであったのか。動詞活用に関するこれまでの言及は、専門の論考以外にも比較的体系的ないわゆる文法書というべき書物に示されたものもあり、数かぎりない。ここではこれまでの研究の主だったものについて、動詞活用についての分析の方針を軸に整理し、その立場の問題点を考えることにする。

2・1 学校文法的な分析

さて、動詞活用の分析としてもつともよく知られるのは、いわゆる学校文法のものであろう。現代日本語に対する学校文法の活用整理についての批判は、寺村秀夫による批判にほぼつきるといってよい。⁽²⁾それは、(i)活用形の認定、定義、命名が無原則で一貫性がない、(ii)多くの説明に事実にあわない点がある、(iii)現代語の活用の記述にとつては意味がなく不必要と思われる点もいくつかある、という批判である。このうち、(ii)は語幹が定義にあわない認め方をされているとか、仮定形「書け」は仮定の意味を表していないなどといったことであり、(iii)は上一段と下一段の区別は不要、終止形と同形の連体形も不要であるなどといったことである。これは文語文法の枠組にしたがうことによる問題で、現在の現代日本語文法論においてはこの活用分析をとるということは、まずない。⁽³⁾ただし、そのような問題点はないながらも、この枠組の原理にしたがうかぎり、問題となる形式は網羅しているというのは間違いないところで、その点では一定程度の理はあり、留意しておく必要はあるように思われる。⁽⁴⁾

2・2 文法的な意味・機能にもとづく分析(1)

ところで、活用とは語形の問題でもあるが、活用形の変化で文法的意味が変わるといふ現象でもあることから、文法的意味・文

表1 三上章の活用表とモード

完了	基本	テンス	結び	命令法
取ッテ	取リ	中	終止法	行ケ
取ッタル	取ル	自立	断定法	行ク
取ッたら	取レバ	仮定	推量法	行カウ
取ッたらウ	取ロウ	想像	仮定法	行ケバ
	取レ	命令		

法的な機能を基準にして、活用分析をおこなうという考え方がある。その場合、まず視点とされるのは文法カテゴリーのうちモード(法)の側面である。それは、印欧語の活用が、人称・数・性のほか、モードの表しわけにかかわるものだという理解にしようことによるものであろう。ただ、それだけでは語形を十分にとらえきれないことから、モード以外の他の文法カテゴリーや、「切れ続き」を考え合わせて分析することになる。

このようなタイプの活用分析には、三上章・阪倉篤義・芳賀緩らの考え方がある。たとえば、三上章の場合、時期によって名称が異なり、若干の出入りもあるが、おおよそ「表1」のようになる⁽⁵⁾。三上はヨーロッパ語の conjugation と共通する概念へ「活用」概念を向け直すべきだとし、まずモードを軸に活用形を認めていく。三上のモードの把握は「表1」右のようであって、これをもとに連用形(中立形)を加える形で基本系統の一系列(「取り・取ル」等)を認める。そして、ヨーロッパ語と共通する活用を認めるのに必要な「座標」としてテンスを掲げ、完了系統の系列(「取ッテ・取ッタル」等)を認めたのが、「表1」ということになる。

阪倉篤義は「表2」のように活用形を示す⁽⁷⁾。このうちの基本活用形・第二類活用形・第三類活用形という枠組は「陳述」、すなわち、「表現された事からに対する話し手の立場からする判断、ないしは自らの態度を表明して、文を言い定める」はたらきの性格の違いによって分けられたものである。これら三種のうち、基本活用形の類は論理的・形式的、すなわち客体的な陳述であり、

第三類活用形は言語主体の情意にかかわる主體的な陳述、第二類活用形はその両面をもつものとする。この話し手の立場からする判断・態度というものがモードにかかわるものだと考えれば、この活用形の整理は、まずはモードにもとづく整理であるといえる。そして、この三類は、さらに切れ続きで分けられる。基本活用形でいえば、基本形は終止用法となり、中止形は中止用法、連体形は連体用法になるものである。第三類活用形でいえば、命令形は終止的陳述となり、仮定条件形は「バ」に連なるといったものである。このようにして、この三類につき、種々の形

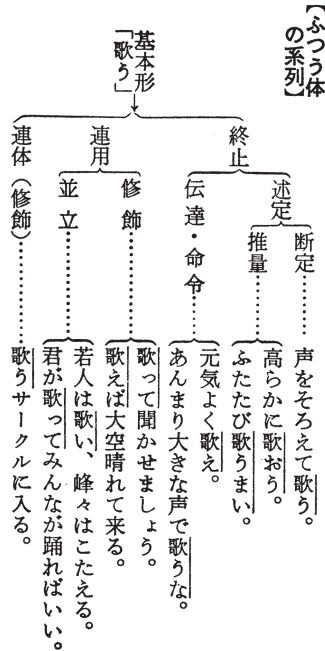
表2 阪倉篤義の活用表

〔基本活用形〕		
基本形	kak-u	
中止形	kak-i	
連体形	kak-u	

〔第二類活用形〕		
丁寧形	kak-i	(マス)
否定形	kak-a	(ナイ)
完了形	kai	(タ)
接続形	kai	(テ)
推想形	kak-u	(ラシイ)
否定推想形	kak-u	(マイ)

〔第三類活用形〕		
想像形	kak-u	(ダロウ)
仮定条件形	kak-e	(バ)
志向形	kak-o:	
命令形	kak-e	

表3 芳賀綏の活用表



を切れ続きから整理をする。ただし、「書くらしい」でいえば、このうちの「らしい」の部分は、アクセントの面から考えると、一定程度自立性があるといえることから、「書くらしい」全体を一活用形として立てることは避け、「らしい」をとりのぞいた「kak-u」の部分を活用形として推想形とする。このようにして整理をしたのが、「表2」である。

逆に、切れ続きを第一の視点とするものに芳賀綏の分析がある〔表3〕。芳賀は、まず、切れ続きで終止・連用・連体とわけ、そのうちの終止につき「モードゥス」(いわばムード)の点から、述定・断定・述定・推量・伝達命令のようにわけている。なお、「歌わない」「歌った」「歌いそうだ」の傍線部は、派生にともなう変化形とされ、活用形から除外されている。

式が別活用形として認められているという点である。右の例でいえば、阪倉の基本形「歌う」という形は、同時に連体形・推想形・否定推想形・想像形でもあり、芳賀でいえば断定形「歌う」は連体形でもある。もちろん、それらは機能が異なることによつて別活用形とされているわけであるし、その機能も無秩序に認められたわけではないが、では、どれほどの機能をわけて別活用形にすべきなのかという点で疑問なしとはいえない。このような点は実はすでに松下大三郎が「迂愚な活用図」としての「写実的活用図」といういいかたで批判しているものであつて、文法的な意味・機能にもとづく活用分析においては問題になりがちなことなのである。

また、このような分析は、逆に必要な活用形が網羅されているのかという点も心配になる。もちろん、阪倉のように活用形とする部分を短く設定すれば、形の上では網羅的になっているわけであるが、機能からみた際、13活用形でそれで十分なのかという点では確信がもてないところであるし、三上・芳賀の場合は、活用部分をもう少し長くみているのであるから、9～10の形をわけておくということでも十分なのか、やはり、わからないところである。

このような問題は、結局は、これらの議論において何なら活用で何なら活用ではないのかの基準がはっきりしていない、または、活用形をどのような手続きで認めたのかははっきりしない、ということに起因すると考えられる。たとえば、三上・芳賀のような語形のとらえかたをするのであれば、「取りつつ・歌いつつ」「取ると・歌うと」といった形がなぜ活用ではないと判断されたのかということとはっきりしない。もちろん、「歌わない」や「歌った」のように活用形ではないと判断された理由がある程度わかる場合もないではないものの、総じてその判断の根拠はおぼつかない。もともと、三上章のように「くわしくは将来の研究にゆずり、ここではだいたいの方針を述べ、さし当っての前進に間に合う程度に活用形を立てよう」などというような場合もあって、あるいは厳密な網羅性を志向していないということもあるのかもしれないが、そうであったとしても、最終的には、その点を詰めておかなければ、不十分の誇りはまぬかれ得ないであろう。

2・3 文法的な意味・機能にもとづく分析(2)

その点で、活用形を認める方針を明瞭に示す議論がある。文法的な意味・機能にもとづく分析としては渡辺実の議論がある。渡辺は切れ続き、なかでも自身の構文理論にもとづく構文的職能にしたがって活用形を認める⁽¹⁾。そのような枠組を認めるにあたり、渡辺は①統叙を託され、かつ陳述もしくは再展叙を託される形態のみを活用形と認める、②陳述・再展叙のどの特定職能が託されるかで判別する、③形態の異同にこだわらず職能の異同に基準を置くという方針を立て、それにしたがって活用形を認める。活用形を認める方針の明確な議論である。渡辺の認める構文機能としての職能は、連体・連用・誘導・接続・並列・陳述であるから、この各職能に対応する連体形・連用形・誘導形・接続形・並列形と陳述に対応する2種の形、独立形・陳述形が認められることに

表4 渡辺実の活用表

確認用言	否定用言	指定助動詞	形容動詞	いわゆる形容詞	動詞	素材表示	成分構成	成分発展	成分該当	用法/活用形		(従来)						
										連体成分	連用成分		連体形	連用形1	連用形2	(仮定形)	連用形3	終止形
読んだ	読まない	×	確かな	珍らしい	読む	肖る		素材化 並列助詞 誘導助詞 連用助詞 接続成分 副助詞下接 係助詞下接	連体成分	連用成分	連体形	連用形1	連用形2	(仮定形)	連用形3	終止形	命令形	
×	読まなく	×	確かで	珍らしく	読み	肖												
×	×	×	確かに	珍らしく	×	肖て												
読んだら	読まなければ		確かならば	珍らければ	読めば	肖れば												
読んだり	読まなくて		確かで	珍らしくて	読んで	肖												
読んだ	読まない		確かだ	珍らしい	読む	肖る	独立素	接続成分 陳述成分 「(らしい)だろ」 etc.										
読んだ	×	×	×	×	読め	肖よ												

*は形式的連用形

なる。さらに、それ自身が関係構成的職能を託され成分を形成するもの、他の形態意義的単位と連結して関係構成的職能を託され成分を形成するもの、それ自身が関係構成的職能と託されて成分を形成した後、重ねて成分形成のための要素が付加的に表現されたものにわけ、それぞれ成分該当・成分構成・成分発展の用法と位置づける。ただし、「読も(う)」「読ま(ない)」などにおける「読も」「読ま」の部分には職能を認めるのは困難である(②に反する)ことから、「読もう」「読まない」ということになる。

また、方針の明確な議論として、いわゆる教科研の議論がある。これは、独立しない形式は語ではなくすべて語の一部である、という立場から活用をとらえる立場である。このような方法は、動詞の活用でいえば、動詞に後接する非自立形式はすべて動詞本体込みで活用形となるという考え方であるから、活用形整理の方針は明確なものとい

表5 高橋太郎の活用表（1）
動詞の基本的な活用表

機能	ムード	ていねいさ		ふつう体の形式 (ふつう体の動詞)		ていねい体の形式 (ていねい体の動詞)	
		みとめ かた		みとめ形式 (みとめ動詞)	うちけし形式 (うちけし動詞)	みとめ形式 (みとめ動詞)	うちけし形式 (うちけし動詞)
		テンス					
終止形	のべ たて形	断定形	非過去形	よむ	よまない	よみます	よみません
			過去形	よんだ	よまなかった	よみました	よみませんでした
		推量形	非過去形	よむだろう	よまないだろう	よむでしょ う	よまないでしょ う
			過去形	よんだ(だ) ろう	よまなかった (だ) ろう	よんだでしょ う	よまなかった でしょう
	さそいかけ形		よもう	(よまない)	よみましょ う	(よみますま い)	
	命令形		よめ	よむな	よみなさい		
	連体形		非過去形	よむ	よまない	(よみます)	(よみません)
		過去形	よんだ	よまなかった	(よみました た)	(よみません でした)	
中止形	第一なかどめ		よみ	よまず(に)	よみまして	よみませんで (して)	
	第二なかどめ		よんで	よまないで (よまなくて)	よみまして	よみませんで (して)	
	ならべたて形		よんだり	よまなかった り	(よみまし たり)	(よみません でしたり)	
条件形	(バー条件形)		よめば	よまなければ	(よみます れば)		
	(ナラ条件形)		よむなら	よまないなら	(よみます なら)		
	(タラ条件形)		よんだら	よまなかった ら	よみまし たら	よみません でしたら	
	(ト条件形)		よむと	よまない と	よみます と	よみません と	
譲歩形	(テモ譲歩形)		よんでも	よまなくても	よみまし ても	(よみせん でも)	
	(タッテ譲歩形)		よんだって	よまなくた って			

える。この教科研は現代日本語の動詞形態に関して積極的に発言してきた研究グループであり、ここではそのメンバー、高橋太郎の活用論をみる^(註)。これは分析視点として、文法カテゴリのうち先にみたムード・テンスを含め、それ以外のさまざまな文法カテゴリを観点とし、それに切れ続きの側面も加えた整理である。単語が文のなかでとるかたちを語形、単語の語形変化のセットをパラダイムと呼び、動詞のパラダイムを示したものを動詞の活用表とする〔表5〕。動詞の語形は、まず屈折、すなわち語尾のとりかえを基礎としてつくられる。これは「よ

む、よんだ、よむだろう、よもう、よめ：」のようなもので〔表5〕縦軸)、ムード・テンスの文法カテゴリを表し合わせるものとされる。そして、それにやはり文法カテゴリとしてのていねいさ・みとめかたを表し合わせる接尾辞のついた形「よみます・よまない」を加える〔表5〕横軸)。さらに、終止形・連体形・中止形・条件形・譲歩形という「機能」——いいかえれば、切れ続き——と呼ばれる枠組による整理を加えて「せまい意味での語形」とする。ただ、その外側にもさらに語形はあると考え、「表6」のように受身・使役等の接尾辞をつけた「よまれる・よませる」などの文法的な派生動詞、「よ

表6 高橋太郎の活用表(2)

語構成などのつづきによって動詞的なカテゴリーを実現する形式

つづき カテゴリー	もとの 動詞	文法的な 派生動詞	文法的な 複合動詞	文法的な くみあわせ動詞
ヴォイス動詞	よむ	よまれる よませる	よみあう	
アスペクト動詞	よむ			よんで いる よんで ある よんで いく よんで くる
局面動詞			よみはじめる よみつづける よみおわる	よんで しまう よもうと する
もくろみ動詞				よんで おく よんで みる よんで みせる
やりもらい動詞				よんで やる よんで もらう よんで くれる
可能動詞		よめる	よみうる	よむ ことができる
敬讓動詞		よまれる およみする	およみなさる およみいたす およみもうし あげる	およみに なる
その他	仮定動詞			よむと する よんだと する
	例示動詞			よんだり する

ことになるはずであるが、その全貌は示されることがない。また、高橋の示すものでいえば、その中核となる「せまい意味での語形」〔表5〕のメンバーも、なぜそれらがそのメンバーとなるのかは明瞭ではない。たとえば、「よまない・よみます・よみません」は文法的な派生動詞で「表5」のメンバーであるが、同じ文法的な派生動詞であっても、「よまれる・よませる」はそのメンバーではない。そのあたりの整合性には問題がある。加えていえば、渡辺の終止形と連体形、高橋の終止形・断定形・非過去形と連体形・非過去形のように同形にもかかわらず別活用形になるというものが、やはりみられ、先に掲げたものにまして「迂愚な活用図」

みはじめる」などの文法的な複合動詞、「よんでいる」などの文法的なくみあわせ動詞を認める。それらに加え、「よみつづ」などの副動詞、動詞の連体形に「の」をくつつける動名詞、「よみたい」「よみそうだ」などの文法的な派生形容詞、さらには、終助辞・接続助辞のつくかたちすべてを含めて語形とし、それがパラダイム、すなわち活用をなすと考えるものである。

以上のような渡辺や教科研の議論は活用分析の方針が明確なもので、その点では歓迎すべきものである。そして、これらの議論の方針にしたがえば、論理的には活用形は網羅的にとらえられ、漏れはないはずである。ただ、いずれにおいても——その語形が膨大になるからか（とくにいわゆる助詞類が付加される形は相当膨大になる）——そのすべての形が示されることはない。とくに教科研の場合は、きわめて膨大な活用体系が構築される

表7 寺村の活用表

動詞 I類 (V_Iと略記) 語幹が子音で終わるもの
 II類 (V_{II}と略記) 語幹が母音で終わるもの
 III類 (V_{III}と略記) クルとスルおよびスルの変種
 形容詞 (Aと略記) : samu-, ôki- など。

ムード	基本語尾	タ系語尾
確言	V { I -u II -ru III {suru kuru } } <基本形> A -i	V { I -ta~da II -ta III {sita kita } } <過去形> A -katta
概言	V { I -ô II -yô III {-siyô -koyô } } <推量意向形> A -karô	V { I -tarô~darô II -tarô III {sitarô kitarô } } <過去推量形> A -kattarô
命令	V { I -e II -ro III {-siro -koi } } <命令形> A —	—
条件	V { I -eba II -reba III {sureba kureba } } <レバ形> A -kereba	V { I -tara~dara II -tara III {sitara kitara } } <タラ形> A -kattara
保留	V { I -i II -i III {si ki } } <連用形> A -ku	V { I -te~de II -te III {site kite } } <テ形> A -kute
		V { I -tari~dari II -tari III {sitari kitari } } <タリ形> A -kattari

< >は通称を示す

以上のように文法的な意味・機能にもとづく分析は、網羅性という点や同形式異活用形という点で問題を含む。これに対して、形態にもとづく分析は、形態をとりあげる方針がしつかりしていれば、そのような問題は論理的にはおこらない。そういう点で、寺村秀夫の活用論は形態をとりあげる方針を示した上で活用形を整理しているものである。その結果が「表7」のような活用表である。¹³⁾ 次が寺村の活用整理の方針である。

(i) 活用語尾は単一の形態素であること。

(ii) 活用語尾たる形態素には、それでその発話が言い切りになるか否かは別として、それに固有の描叙類型的意味が認められること。

(iii) 形態的に同一である活用語尾は、構文的機能は違っても、同一の活用形とする。逆に、構文的機能は同一、または似通っていても、形

2・4 形態にもとづく分析

としての「写実的活用図」に陥っているという可能性があるのではないかと思われる。

態的に異なるものは別の活用語尾とし、呼び名の上でも区別する。

この(i)(iii)——とくに後者は同形式異活用形を避けるもの——からすれば、寺村の分析は形態的なところに基盤があるものと考えられる。ところが、寺村は(ii)のように「描叙類型的意味」という意味も問題にする。そもそも、寺村における活用とは「話し手の態度を表わすべくどうしても述語がそこから一つを選ばなければならない形態素の体系」で、「唯一の必須ムードが活用」とされ、実は文法的な意味も問題にするものなのである。もちろん、この形態的側面と意味的側面とで齟齬がおきなければよいのであるが、事實は、ムード「保留」のなかに複数の形式があり、異なる形でムードを表しわけているということにはなっていない。さらに、寺村自身、活用形とムードは一対一には対応しないと述べており、それは右の規定と齟齬があることになっている。加えて、やはり活用形の網羅性の問題がある。たとえば、「書きつつ」「書きながら」などがあらわれないのはなぜなのか。あるいは、寺村が示す指針にしたがい、寺村が別途助動詞と認めるようなものを丁寧に考えていけば、「表7」のような表が導き出されるのかもしれないが、実際に、どのように指針にしたがって活用形を認めていったのかという細部は、具体的に述べられていない。

このような点で、その方針が明確な形態的な分析としてハイコ・ナロク、江畑冬生の議論があり、これらはきわめて注目すべきものといえる。ただし、これらについては、その評価も含めて後にふれることにする。

2・5 拡大活用論

右のように、活用論においては形式と文法的意味との齟齬が問題になることが多いのであるが、その点を解消するために、活用の範囲を拡大して考えようとする議論がある。野田尚史の拡大活用論⁶⁵⁾である。文法カテゴリを表すヨーロッパ系言語の「活用」と切れ続きを表す日本語の「活用」は全く違うように見えるが、それは言語の違いというより「活用論」の違いによるもので、文法カテゴリの値を指定する「内の活用」と文中の他の成分との関係を指定する「外の活用」を措定し、その上で、ヨーロッパ系言語と日本語を比べてみると、述語の構造という点では、両者の違いは小さいとする。そこで、「語」としての形態変化ではなく、「文の成分」としての述語の構造を考える「拡大活用論」を提案し、これによれば、さまざまな言語の「活用」を統一的に記述できる

とする。これは、たしかにそのとおりではある。ただ、述語の構造を比べるのであれば、述語・用言（複合体）の構造論といえはよいのであって、なぜわざわざ「活用」といわなければならないのか、その点は不審である。

2・6 問題点まとめ

以上のように、これまでの活用論をみてくると、次のような点で問題があることがわかる。

(3) a 何なら活用で、何なら活用ではないのかの基準がはっきりしない。

b 活用形をどのような手続きで認めたのかがはっきりしない。

この問題を解決するためには、活用形を認める具体的な指針と、実際にその指針を運用したその手続きを示す必要がある。そして、その指針を決めるためには、次の点がはっきりしている必要がある。

(4) そもそも活用論は何の論であるのか。

この点でいえるのは、右のように文法カテゴリを優先に考える考え方があるわけであるが、たとえば、ムードといったような文法的意味からの整理では、形態と文法的意味との間で齟齬が生まれ、うまく整理できなかつたわけであるし、ある文法的な形式がどのような文法的意味を表すのかということは、アプリオリに決まっているわけではない——だから、活用がヨーロッパの言語のように文法カテゴリの意味を表したり、日本語のように切れ続きを表したりする——わけであるから、形の整理に文法カテゴリを組み合わせようとするのは、まずは「素直」とはいいにくいのではないか。それは、寺村の言い方（Ⅱ(1)）をふりかえってみれば、「形の上で」「虚心に見て」いないということの意味するように思われる。つまり、この問題を考えるためには、形態の整理として「虚心に見て」、いくことが重要なのではないかと考えられるのである。

3 ここでの考え方

そこで、ここでは活用の論は、まずは形態の分析記述＝形態論と考え、形態論の基本にそって記述する。つまり、形態論の常識的な概念・用語で記述する、いいかえれば、策を弄せず、「普通」に考えるということである。⁽¹⁶⁾その理由は以前にも述べたが、語の認定や形態素の分類の基準や概念は言語をはかる尺度・「ものさし」ともいえるものである。ある特定の言語体系を記述するものに都合のよい規定のしかたをするのは望ましくないからである。そこで、このような考え方にしたがって、次に形態論のための基本的な概念を提示する。⁽¹⁸⁾

- (5) a 語基 base：語の構成要素の中で、あらゆる接辞 (affix) を取り除いた後に残る部分。語構造の基幹的要素。
- b 接辞 affix：語基 (base) に添加されて主に文法的意味を表す語構成上の要素。語基との位置関係によって接頭辞 (prefix) 、接中辞 (infix) 、接尾辞 (suffix) に分けられる。また、文法的性質によって、派生接辞 (derivation) と屈折接辞 (inflection) とに区別される。
- c 活用 conjugation：動詞・助動詞の屈折 (inflection) のこと。名詞の曲用 (declension) に対する。活用には、接辞 (affix) によるものと、母音またはアクセントの交替によるものがある。
- d 語幹 stem：語 (word) の構成要素の一つで、屈折接辞 (inflection) を除いた後に残る部分。
- e 屈折 inflection：語が文法機能を果たすために行う語形変化のこと。屈折には大別して、接辞 (affix) の添加によるものと、母音 (稀に子音) またはアクセントの交替によるものがある。
- f 派生 derivation：単一語または合成語に接辞 (affix) を加えたり、一部分の音韻を変化させることによって、新しい語を作ること。

このような形態論的な概念によって語形を整理するというのが、ここでの立場である。文法カテゴリや「描叙類型的意味」のような文法意味的な側面を認定の基準とはしない。それは、繰り返すが、活用という形態現象が文法カテゴリや「描叙類型的意味」を

反映するかは、保証のかぎりではないからである。

また、このような概念につき、考えておくべきは、(5) e 屈折と(5) f 派生の区別である。(5) c のように動詞・助動詞の屈折 (inflection) を活用と規定するわけなので、この概念が活用を考えるにあたって重要になる。そして、この派生接辞と屈折接辞の区別であるが、ここでは、L・J・ウエイリーの示すところにしたがうことにする⁽¹⁹⁾。

(6)

性質	派生	屈折
意味上の作用 語類への作用 生産性 対立要素の範例 意味上の予測可能性 配置	大きな変化 転換しうる 限定的 ない ない (個々にみるしかない) 語根の内寄り	小さな変化 転換しない 非限定的 ある 予測可能 語根の外寄り

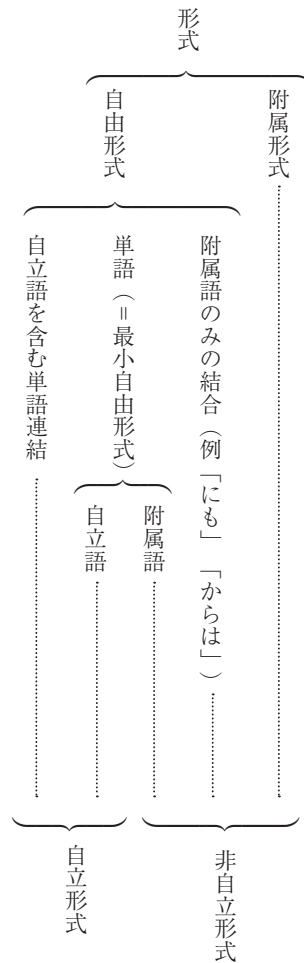
(F) (E) (D) (C) (B) (A)

もちろん、当該の接辞がこの条件で截然と分けられるわけではないことも知られており、これらの条件がどの程度あてはまるのかということを考え、屈折接辞か派生接辞かを考えていく。

もう一点考えておくべきは、それは、語 (単語) という単位についてである。形態論が問題にするのは「語の形」であるから——動詞という語の形態を考えるには動詞の一部分とはいえない要素、つまり、動詞以外のもの、あるいは動詞以外のものの一部まで含んで検討してはいけないのであるから——当然、語という単位が認定されなければならない。もちろん、語の認定にはさまざまな考え方があり、簡単には解決しない問題ではあるが、ここでは語認定の手続きが明瞭なものであり、その認定方法が広く適用できると考えられるものとして、服部四郎の考え方にしたがうことにする⁽²⁰⁾。服部四郎の形式の分類は次の(7)のようになる。この

うち問題となるのは自立しない形式（非自立形式）のうち、附属形式と附属語である。後者は語であるから、語としての動詞の一部分ではない。逆に前者は語よりも小さな単位であるから、動詞の一部分である可能性があることになる。

(7) 服部四郎の形式分類



そして、この附属語と附属形式を区別するにあたって、服部は次の3つの原則を掲げる。

(8) 原則Ⅰ 職能や語形変化の異なる色々の自立形式につくものは自由形式（すなわち「附属語」）である。

原則Ⅱ 二つの形式の間に別の単語が自由に現れる場合には、その各々は自由形式である。従って、問題の形式は附属語である。

原則Ⅲ 結びついた二つの形式が互に位置を取りかえて現れ得る場合には、両者ともに自由形式である。

原則Ⅰは接続多様性というべきもので、つき得るものの種類が多いというのは、独立度が相対的に高いということである。原則Ⅱは挿入可能性というべきもので、ひとつの語の内部には別の語を挿入することを許さないから、それを許すのであればそれらは独

立的であるということである。原則Ⅲは転換可能性というべきもので、位置の転換が可能であれば、それらはそれぞれ独立的であるということである。この服部原則によって自由形式、すなわち附属語と認められたものは、それ自身が語であるから、動詞の一部ではない。

この附属語のようなものは、先述の教科研のように、独立しない形式（つまり非自立形式）は語とはいえないという立場にあっては語と認められないことになるが、このような非自立的ではあるものの接辞のように語の一部でなく、語と認めるべきもの——接語 *clitic*（あるいは倚辞）——があるということは、近年、積極的に指摘されるところである。宮岡伯人もこのような語の重要性を説き、接辞と接語（倚辞）の区別は重要であるとする。⁽²¹⁾そこで、ここでもこの接語を認め、語と考えることにする。

以下、このような形態論的概念にしたがって、現代日本語動詞の形態・活用を分析していくことにするが、現代日本語といってもさまざまなヴァリエーションがある。ここでは現代日本語の書きことば口語体（共通語）を対象とし、具体的なデータは、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を用いることにする。⁽²²⁾それは、BCCWJによれば現代日本語（共通語）の形態を、おおむねもれなく把握することができる——もちろん内省でも把握できるとはいえるが、その場合、周辺の形式をはずして考えてしまう可能性もないわけではない——と考えられるからである。

4 動詞の一部ではない非自立形式をとりのぞく

さて、現代日本語動詞の活用分析をすすめていくが、まずは、動詞の一部とはいえない非自立形式をとりだしておく。動詞に後接する非自立形式であっても、それが動詞の一部でなければ、明らかに活用語尾ではない——それは同時に、そのような形式は動詞形態論として扱うことのできない形式でもある——からである。その動詞の一部とはいえない非自立形式とは、さきの服部の分類(7)でいえば附属語である。そして、その附属語とは、(8)の服部原則Ⅰ～Ⅲのいずれかをみたすものということになる。

では、この服部原則をみたす動詞後接形式にはどのようなものがあるのか。これにあたるものはBCCWJで考えれば、品詞が助詞・

助動詞とされる形式のなかにあることになる。が、そのうちの主に名詞に後接する助詞、すなわち、格助詞・副助詞（一部をのぞく）・係助詞は、明らかに動詞の部分ではない。これは接続多様性をもつものであって、附属語になる。たとえば、「は」には動詞に後接する「いくらおしたって、鳴りはしないよ」のような例があるが、同時に「私は」「本は」「白くはない」のように、「職能」や語形変化の異なる色々の自立形式につく（服部原則Ⅰ）ので、附属語ということになる。⁽²³⁾したがって、問題になるのは助動詞と、動詞に後接することが多い助詞、すなわち接続助詞・終助詞とである。

まず、BCWJの動詞後接助動詞のうち、「表8」に掲げるもので、「原則Ⅰ」とされるものは、動詞に後接するだけではなく、その他の職能や語形変化の異なる形式につくものである。服部原則Ⅰから附属語、すなわち語として認められるものである。⁽²⁴⁾たとえば、次のようなものである。いずれも動詞だけではなく、形容詞・名詞にも後接しているものであって、動詞の一部とはいえない。

- (9) a つう お金をもらうつてことは、(動詞)..調整が難しいつて事情も(形容詞)..なんだ、この野郎つて。(名詞)
 b です(でしょう) どうしたらできるでしょうか？(動詞)..何が嬉しいでしょうか？(形容詞)..いい映画でしょうか？(名詞)
 c らしい いろいろな体験をするらしい。(動詞)..寂しいらしいのです。(形容詞)..本人なりに考えた結果らしい(名詞)

ただし、ここにみえる「た」「ず」は、この表からは接続多様性をみ出すようにみえるが、単純に語とすることに問題があると思われるので、これらについては、後にあらためて検討する。

また、この「表8」のなかには動詞との間に別語が入るものがある。「原則Ⅱ」とあるものである。

- (10) a ごとし 仲間入りをするがごとき女性議員「が」
 b つう どっちが正しいと思うかつて事「か」
 c だ 帰るのを待つのだ。「の」

(10) aは附属語である「が」が動詞「する」と「ごとし」の間にあらわれている。これは動詞と当該の形式の間に別語があらわれているということで、「二つの形式の間に別の単語が自由に現れる」(服部原則Ⅱ)から、「ごとし」が附属語であるということになる。(10) bも附属語「か」が動詞「思う」と「つて」の間に、(10) cも附属語「の」が動詞と「だ」の間にあらわれている。やはり、服部原則Ⅱから語である。

そして、「表8」のうち、「ごとし」「です」「らしい」など、表中に*が付されていないものは、*yu-ra*に *goto-si* や *des-u*, *rasi-i* のように分析できる。このうちの末尾の形態素は、後述する屈折接辞に類するものであることから、これらの語は、ここでは〈助動詞〉と呼んでおくことにする。⁽²⁵⁾ *が付されているものは、いつてみれば不変化の附属語であるので、〈助動詞〉に対応させて〈助詞〉と呼んでおく。

なお、この「表8」の「き、ごとし、しめる、む、らし」「じゃ」の網掛をほどこした語は文語形、あるいは方言形というべきもので、共通語の通常の形式とはいいいくと思われる。実際に全用例数も10〜30例程度にとどまっており、頻繁に使われるとはいえない。文語形は威厳のある言い方という印象を与えたり、硬い文体とするために使われるかぎられた形式であるというべきであろう。

次に、BCCWJの動詞後接の接続助詞・終助詞・副助詞をみるが、これらは多くのものが語である。次の「表9」に掲げるものがそれである。これら

表8 BCCWJ 助動詞のうちの附属語

	総数	動詞 接続	上接語					原則	
			動詞	形容詞	形状詞	名詞	その他		
き	18	16	○				なり	I	文語
ごとし	28	1	○				の、が	II	文語
しめる	10	8	○	○			か	II	文語
じゃ*	18	1	○		○	○	の	I・II	方言
ず	2,330	1,090	○	○			なり、べし	※	
た	28,585	20,905	○	○		○	だ	※	
だ	28,130	313	○※	○	○	○	の、から	I・II	※動詞+「だろう」等
つう	162	18	○	○		○	か、だ	I・II	「という」縮約形
です	7,028	136	○※	○	○	○	の、を	I・II	※動詞+「でしょう」
なり	114	3	○		○	○		I	
む*	14	10	○				名詞たり	I	
らし	15	3	○			○		I	
らしい	177	47	○	○	○	○		I	

は、やはり附属語であって、動詞の一部分ではない。これらは動詞に後接するだけでなく、多くの場合、形容詞にも後接する。⁽²⁶⁾さらには、形状詞(いわゆる形容動詞語幹)・名詞に後接するものもある。これは、接続多様性をもつものである、すなわち、服部原則Ⅰをみたすものであるから、いずれも語と語とができるものである。

- (11) a けれど(接続助詞)⁽²⁷⁾ 専門があるのは分かるけど。(動詞)・以前ほどでは無いけど(形容詞)
- b ながら(接続助詞) そんなことを言いながら、男の人から電話がかかってきたりすると(動詞)・射程は短いながら連射のできる弓を(形容詞)・穏やかな口調ながら、「本気で臨んでいる」と(名詞)
- c な(終助詞) 「おもしろいこというな」(動詞)・ちょっと「おかしいな」と思って(形容詞)・ああ、喧嘩な。(名詞)
- d ね(終助詞) 断然強いと思うね。(動詞)・結構、面白いね♥(形容詞)・「それは思いやりね」(名詞)
- e たり(副助詞) 人に渡したり商用利用すると(動詞)・痛かったり、(形容詞)・近頃雨降ったりなんだりで(名詞)
- (11) b の「ながら」は、「そんなことを言いながら、男の人から電話がかかってきたりすると」のような逆接を表すような用法と、「ファイル選択のとき、CEのキーを押しながら選ぶ」とのような並行的な事態を表す用法があり、両者をわけることも考えられるが、ここでは両者とも同時的意味を表す形式として同形式としてみておくことにする。⁽²⁸⁾また、「電話を取るなり罵声」の「なり」は、名詞「なり」(「子どもなりの考え」、ある状態そのまま)と同じものと考ええる。一方、「な」は、「おもしろいこというな」のような念押し・詠嘆を表すようなものと、「あまり物珍しそうにあたりを見るな。物見と間違えられるぞ」のような禁止を表すものがある。両者はその意味がかなり異なると考えられるため別の形式とみることにする。すると、前者の念押しや感嘆を表すものは接続多様性をもつが、後者の禁止を表すものは動詞後接にかぎられることから、前者は語、後者は附属形式とみることになる。
- 同時に、この「表9」のなかには、服部原則Ⅱをみたすものもある。
- (12) a けれど(接続助詞) 藤川だって、もっといけたと思うんだけど。(「だ」)
- b か(終助詞) 最後どうなるのか教えて下さい。(「の」)

表 9 BCCWJ 助詞のうちの附属語

	総数	動詞 接続	上接語					原則
			動詞	形容詞	形状詞	名詞	その他	
が	3,959	541	○	○			だ	I・II
から	1,550	308	○	○			だ	I・II
けれど	676	74	○	○			だ	I・II
し	543	132	○	○			だ	I・II
たって	20	19	○	●				I
て	32,172	29,138	○	○			らしい	※
と	2,287	1,908	○	○			だ	I
とも	67	4	○	○		○	なり	I
ながら	606	494	○	○	○	○	しかし	I
なり	7	7	○			■		I
ば	1,963	1,379		○	○		だ	※
い	20	1	○				だ、か、わ	I・II
か	6,172	291	○	○	○	○	の、また、 そう	I・II
かしら	28	2	○	○		○	の	I・II
さ	114	4	○	○	○	○	だ、の	I・II
じゃん	11	2	○	○	○	○		I
ぜ	18	4	○	○			だ	I・II
ぞ	85	36	○	○		○	だ	I
で	10	1	○	○			ねん、や	I・II
な	733	66	○	○		○	だ、は、よ	I・II
ね	1,400	38	○	○	○	○	だ、は、の、 よ	I・II
ねん	13	1	○				や	I
の	227	68	○	○			だ	I・II
ばい	4	1	○			○		I
べい	4	2	○				だ	I
もの	36	2	○	○			だ	I・II
や	24	8	○	○				I
よ	1,344	112	○	○	○	○	だ、の、わ、 そう	I・II
わ	141	27	○	○			だ	I・II
たり	669	571	○	○		○	だ	I・II
って	751	34	○	○	○	○	だ、の、な	I・II

●非コア

※

「平行」意と「逆接」
意と同語とみる

■名詞「なり」と同語
とみる

方言形

禁止「な」は附属形式。
他は語

方言形

方言形

方言形

一部、方言形

c ね (終助詞) 英語は通じ^るのねと (「の」)

d って (副助詞) もう気配が伝わ^{つて}くるワケ、始^{まる}な^{つて}。 (「な」)

これらは、動詞とこれらの形式の間に、「その他」に示したような形式「だ」「の」「な」といった付属語——たとえば、「だ」であれば、「本^だ・読^むの^だ・白^いから^だ」のように原則Ⅰをみたま形式——が介在するものであって、原則Ⅱをみたまことから、やはり、これらも付属語である。ただ、この「表9」中の原則Ⅱをみたまものは、ほとんど同時に原則Ⅰもみたましている。ただし、ここにみえる「ば」「て」は、ここからは接続多様性をみたますようにみえるが、単純に語とすることに問題があるものと考えられることから、これについては、後に検討することにする。

以上の「表9」に掲げられたものは、1形態素であつて屈折接辞をもたない接語であるから、さきと同様(助詞)と呼んでおくことにする。また、「表8」と同様に、「表9」も網掛の語は方言形というべきもので、共通語の通常の形式とはいいいにくいものであろう。全用例数も数例からせいぜい10例をこえるにとどまるものである。

以上のようにみてみると、BCWJで接続助詞・終助詞・副助詞とされるものは、「つつ」「ど」「な(禁止)」「つ」をのぞき、服部原則Ⅰ／Ⅱをみたますことから、いずれも付属語であつて、動詞の一部分ではないことになる。

5 動詞の一部である非自立形式

5・1 派生用言を形成する派生接辞

次に動詞に後接する非自立形式のうち、語ではなく、動詞の一部分であるものを検討する。問題となるのは、BCWJで品詞が助動詞とされる形式である。先に「表8」として掲げたものは、それ自身が語であるから、それ以外のものである。それを示すと、次の「表10」のようになる。これらは、基本的には動詞に直接接続するか、これらどうしが接続することはあるものの、動詞のみに後接するものである。また、動詞とこれらとの間に別語が入ることはないもので、服部原則Ⅱの挿入可能性はなく、また、同Ⅲ

の転換可能性もないと思われる。つまり、附属形式である。
 また、これらの形式をさらに分析すると、唯一「まい」をのぞき（後に検討する）、たとえば、「させる」であれば、*sase-ru*、*sase-0*、*sase-yoo*、*sase-10*、「れる」であれば、*re-ru*、*re-0*、*re-yoo*、*re-10*のように、また、「てる」であれば、*te-ru*、*te-10*のように

表 10 BCCWJ 助動詞のうちの附属形式

	総数	動詞接続	
させる	87	87	
じ	1	1	文語
せる	1,050	1,049	
たい	1,071	1,032	
たがる	17	16	
たり	48	5	完了「たり」は附属形式。文語
たる	3	3	「てやる」縮約形。方言形
ちまう	8	8	「てしまう」縮約形
ちやう	161	155	「てしまう」縮約形
ちやる	2	2	「てやる」縮約形。方言形（九州か）
てく	9	9	「ていく」縮約形
てらっしゃる	7	7	「ていらっしゃる」縮約形
てる	1,228	1,147	「ている」縮約形
とく	23	23	「ておく」縮約形
とらす	1	1	「ておらす」縮約形。方言形（九州か）
とる	5	5	「ておる」縮約形。方言形
ない	5,595	5,078	
なんだ	1	1	方言形
ぬ	6	6	文語。完了「ぬ」
はる	11	6	方言形
べし	418	395	
へん	12	11	方言形
まい	33	31	
まじ	2	2	文語
ます	7,778	7,040	
やがる	14	8	
やす	1	1	方言形
よらす	1	1	方言形
よる	1	1	方言形
られる	1,758	1,734	
り	573	573	動詞がきわめて限定的。
れる	6,148	6,144	

なり、さらに、「ない」「たい」であれば、*na-i, na-ku, ta-i, ta-ku* のようになり、複数の形態素からなっている。そして、その末尾の形態素は、動詞あるいは形容詞の末尾部分に類するものといえる。

(13)

食べる	させる	れる	高い	ない	たい
<i>tabe-ru</i>	<i>sase-ru</i>	<i>re-ru</i>	<i>taka-i</i>	<i>na-i</i>	<i>ta-i</i>
<i>tabe-∅</i>	<i>sase-∅</i>	<i>re-∅</i>	<i>taka-ku</i>	<i>na-ku</i>	<i>ta-ku</i>
<i>tabe-yoo</i>	<i>sase-yoo</i>	<i>re-yoo</i>	<i>taka-kereba</i>	<i>na-kereba</i>	<i>ta-kereba</i>
<i>tabe-ro</i>	<i>sase-ro</i>	<i>re-ro</i>			

ここにみられる動詞末尾形態素および形容詞末尾形態素は、後に活用語尾と認めるものである。この附属形式の末尾の形態素も屈折接辞と考えられよう。

さて、この末尾の接辞をのぞいたものが、ここで問題とすべきものになるが、これらはおそらく派生接辞だと考えられる。これらは、派生接辞と屈折接辞の差異を示したさきの(6)でいえば、まず、(6) D対立要素の範例(そのパラダイムのなかのひとつ)が必ず選択されなければならないということ)はないものである。つまり、*sase(-ru)* でいえば、*sase(-ru)* が用いられない場合、その代わりに別の形が必ず選ばなければならないということとはない(逆に、*tabe-ru* の *-ru* であれば、*-yoo* とか *-ro*、*-∅* から必ずひとつ選ばなければならない)。そして、*tabe-sase-ru* のようになることから、より語根 *tabe* に近いところに位置する接辞である。これは、(6) F語根の内寄り(語幹に近い)ということである。また、上述の「ない」「たい」はこれらが動詞に後接した形式全体をみれば、「食べない」「読まない」「打消」、「食べたい」「読みたい」「希望」というように、それらは動作を表すというよりも何らかの状態を表すものになっているといえ、語形変化も(13)のように形容詞に類似する形になることからすれば、これらは形容詞的なものになっていると考えられる。いわば、動詞について形容詞的なものにするという(6) B語類を変えるはたらきをもつといつてよい。加えて、使役や受身の意味が付け加わる、あるいは、状態的な意味に変わるといふことで、(6) A意味の変化も大きいといつてもよいだろう。以上のように、これらの接辞は上記(6)のうちの、A意味上の作用・B語類への作用・D対立要素の範例・F配置

という点で派生接辞の性格をそなえている。このことから、これらは派生接辞と考えることにする。ただし、これらは動詞であればかなり規則的に後接することができるので、C生産性は高い（非限定的である）といつてよいし、また、その接辞が付加されれば、その接辞のもつ意味が規則的に加わることから、E意味の予測可能性もあるということになる。そういう点で、派生接辞の特徴をすべてみたすわけではないが、総合的にみて、派生接辞と考えることに問題はないであろう。

そして、「表10」に掲げた附属形式のうち、「させる・せる」と「られる・れる」は異形態である。意味は同じであるし、この組のうちの前者「させる・られる」は、「食べる・起きる」の類の動詞に、後者「せる・れる」は「読む・走る」の類に後接して相補的になっているからである。

- (14) a *tabe-sase-ru, oki-sase-ru/tabe-yare-ru, oki-yare-ru* (食べる・起きる類)
 b *yom-yase-ru, hasir-ase-ru/yom-are-ru, hasir-are-ru* (読む・走る類)

ただし、「起きる・起きさせる」を *oki-ru, oki-sase-ru* とするに對しては、「読ませる」の動詞不変化部分は *yom* であることから、「読ませる」は *yom-yase-ru* のようにすべきである。したがって、精確に言えば *sase-ru* と *ase-ru* とが異形態をなすということになる。

それから、先にみた附属語の場合もそうであったが、この附属形式にも文語形、あるいは方言形というべきものがある。「表10」の網掛の形式である。こちらにも用例数は多くなく、方言形を含めこれらは共通語の通常の形式とは考えず、後に全体を整理するにあたっては割愛することにする。なお、「たり」のうち、附属形式であるものは、「学問したる者」のような、いわゆる完了を表す形式であって、「百済王たるわたくし」のようなコピュラ形式は接続多様性をもつ語である（いずれも文語形）。

さて、以上の考え方にそつて派生接辞を整理すると、次のようになる。() 内は接辞の概略的な意味である。

- (15) a (s) *ase-ru* (使役) / *tagar-u* (希望) / *tinuu-u* (完了) / *tyuu-u* (完了) / *tek-u* (移動) / *teruqsyar-u* (尊敬) / *te-ru* (継続) / *tok-u* (設置) / *mas-u* (丁寧) / *yagar-u* (卑属) / (r) *are-ru* (受身) / *ri-i* (完了)
 b *ta-i* (希望) / *na-i* (打消) / *be-si* (義務)

このうち(15) a は派生接辞のしたがる接辞が動詞的なもの、(15) b は形容詞的なものである。そして、この派生接辞は動詞について、

使役なり希望なり、打消なりの意味を付加し、その後にくく屈折接辞のホストになるわけであるから、拡張された語幹を形成するものということになる。つまり、(s)ase-ru は tabe-sase という拡張された語幹（使役派生動詞語幹）を形成し、「食べさせる」 tabe-sase-ru という使役派生動詞をつくるものである。na-i は tabe-na という拡張語幹（打消派生形容詞語幹）を形成し、「食べない」 tabe-na-i という打消派生形容詞をつくるものである。結局、これらは拡張語幹を形成する派生接辞と位置づけられるものである。いいかえれば、派生用言を形成する派生接辞ということになる。

5・2 動詞に後接する屈折接辞（活用語尾）

さて、動詞の一部分である要素をさらにみると、次の(16)のような部分があることがわかる。その部分のあり方の類型は、およそ3種（〜4種）になると考えられるので、その3類を示す。具体的には「持つ」「起きる」「する」である。

(16)	持つ (RC)	起きる (RV)	する (IS)
〈終止〉	mot-u	持 <small>つ</small> oki-ru	起 <small>き</small> る su-ru
〈条件〉	mot-eba	持 <small>つば</small> oki-reba	起 <small>き</small> れ <small>ば</small> su-reba
〈命令〉	mot-e	持 <small>て</small> oki-ro	起 <small>き</small> ろ <small>*</small> si-ro/se-yo
〈成立〉	mot-i	持 <small>ち</small> oki-o	起 <small>き</small> し si-o
〈意志〉	mot-oo	持 <small>とう</small> oki-yoo	起 <small>き</small> よ <small>う</small> * し <small>よう</small> si-yoo

これらのうち、「持つ」でいえば「mot-」、「起きる」でいえば「oki-」の部分は動詞の中核的意味にかかわる基幹的要素である。また、「する」の場合は、su-, si-, se- のような複数の形があるが、-ru や -reba など接辞のホストであって、中核的意味にかかわる基幹的要素といつてよい。これに対して、それらに続く (r)u, (r)eba, e(ro)yo, i(o), (y)oo の部分は、これらのうちの1つが必ず選ばれるものであって、かつ、品詞転換にもかかわらず、語根の外寄りに位置するものであるから、屈折接辞、すなわち活用語尾と考えられる。この活用語尾については、その代表的な意味により（〜）内に名称を与えておくことにする。このように、これらが活用語尾

であるとすると、これらのホストとなる *mot-*, *oki-*, *su-/si-/se-* の部分は語幹 stem と *su-/si-/se-* になる。つまり、「持つ」は語幹 *mot* に *-u*, *-eba*, *e* などの活用語尾がつくことになる。「起きる」であれば、語幹 *oki* に *-ru*, *-teba*, *-ro* などの活用語尾がつく。そして、「する」の場合は複数の語幹をもつことになるであろう。また、「持つ」の終止 *ru* と「起きる」「する」の *-ru* は同機能で相補分布をなすことから異形態であるといえる。同様に、*-eba/-teba*、*-e/-ro/-yo*、*-i/-o*、*-oo/-yoo* もそれぞれ異形態である。なお、「持つば」「起きれば」は、「少なければ」「しなければ」などにも「は」があるから、*mot-e-ba* (*mot-e=ba*) / *oki-re-ba* (*oki-re=ba*) のように「ば」を切り出すという可能性もなくならぬ。が、*e/re* だけを形態素とは認めにくから、*-eba*, *-teba* と認めることにする (この場合は、「少なければ」は *sukuna-kereba* 「しなければ」は *kore=nar-aba* と考える。- は接辞境界 (形態素境界)、|| は接語境界を表す)。

これらの6形態のほかに、BCCWJ 助動詞のなかでは「まご」、同助詞のなかでは「つひ」「な」(禁止)が1形態素であって、かつ附属形式、すなわち動詞の一部分であった。これらも語根のもっとも外寄りに位置するものであるので、上記の屈折接辞の一群とみなしておく。すると、活用語尾として次の(17)のようになる⁽²³⁾。

(17)	持 <small>も</small> (RC)	起 <small>お</small> (RV)	す <small>す</small> (IS)
	持 <small>も</small> (RC)	起 <small>お</small> (RV)	す <small>す</small> (IS)
	持 <small>も</small> (RC)	起 <small>お</small> (RV)	す <small>す</small> (IS)
〈打消意志〉	<i>mot-umai</i> 持 <small>も</small> まご	<i>oki-mai/runai</i> 起 <small>お</small> まご/起 <small>お</small> きるまご	<i>su-mai/runai</i> す <small>す</small> まご/す <small>す</small> るまご
〈同時〉	<i>mot-itutu</i> 持 <small>も</small> つひ	<i>oki-tutu</i> 起 <small>お</small> つひ	<i>si-tutu</i> し <small>し</small> つひ
〈禁止〉	<i>mot-una</i> 持 <small>も</small> つな	<i>oki-runa</i> 起 <small>お</small> きるな	<i>su-runa</i> す <small>す</small> るな

さらに考えるべき形式は若干残っているが、以上から動詞の種類については、所属動詞の多さから考えて、「持つ」「起きる」のような動詞が基本的なものであって、「する」(さらに「来る」)類が少数の不規則な動詞であるといえる。「持つ」類を子音語幹動詞、「起きる」類を母音語幹動詞と呼び、正格活用 *regular conjugation* の動詞とする。それに対して、「する」「来る」は変格活用 *irregular conjugation* の動詞と *su-/si-/se-* になる。「する」のような変格動詞は *su-/si-/se-* (*-sa*) のように「来る」は *ku-/ko-/ki-*

のような複数語幹をもつ。以上「持つ」類は、regular conjugation か子音動詞 consonant verb であるので RC「起きる」類は regular conjugation か子母音動詞 vowel verb であるので RVと略称する。「する」は irregular conjugation のサ行動詞であるので IS「来る」は同力行動詞であるので IKとする。

5・3 問題となるもの

ここで、先に保留してきたいくつかの形式について検討を加えることにする。それは、BCCWJ助動詞のうちの「ず」「た」「BCCWJ助動詞の「つ」である。

このうちの、まず「ず」である。これは「表8」によれば動詞にも形容詞にも後接して、あたかも接続多様性をもつようにみえる。しかしながら、この「ず」が動詞につく場合、たとえば、「なる」でいえば nar-azu のようになるが、形容詞につく場合、「少ない」でいえば sukuna-karazu のようになるのであって、動詞についているものは -azu、形容詞についているものは -karazu となり、同じ形式とはいいいにくい⁽¹⁸⁾。そうすると、動詞につく -azu は接続多様性をもつとはいえなくなり、これは附属形式ということになる。なお、-azu は、-az-u などのように複数形態素からなり、また、-an-u (n系と呼ぶ。-az-u は z系) のような異形態をもっているといえる。それを整理すると次のようになる⁽¹⁸⁾。

- (18)
- | | | | | |
|----|------|------------|------|----------------|
| z系 | ならず | nar-az-u | 考えず | kanga-e-z-u |
| | ならぬ | nar-an-u | 考えぬ | kanga-e-n-u* |
| n系 | ならん | nar-an-no | 考えん | kanga-e-n-no |
| | ならねば | nar-an-eba | 考えねば | kanga-e-n-eba* |

ここでは、とりあえずこれらを打消語幹（打消派生語幹）を形成する派生接辞としておく。

次に「た」である。これも BCCWJ 助動詞「た」としてみれば、上接語には(19) a のように、動詞のみならず形容詞、あるいは「名詞+だ」のようなものも可能であり、接続多様性の点からして語であるという考え方もできそうである。が、やはりここではそのようには考えない。

(19) a 書いた、読んだ、食べた、高かった、きれいだった、本だった

b kai-ta yon-da tabe-ta taka-katta kirai=da-ota hon=da-ota

c kai-te yon-de tabe-te taka-kute

それは、(19) a を形態素に分割するとすれば、(19) b のようになるからである (yon-da の da は ta の異形態)。「高かった taka-katta」や「きれいだった kirai=da-ota」に ta はあるが、それを切り出した残りの kaq, o の部分が意味を担うとはいえない。そう考えると、-kata, -ota と考えることになり、=ta (=da) という語を認めることにはならないのである。⁽³⁶⁾このことは「て」も同様であり、動詞につくものは -te (その異形態として -de)、形容詞につくものは -kute ということになる。これらは、先にみた(16)(17)とともに、それらから必ず1つが選ばれるものであって、品詞転換にもかかわらず、語根の外寄りに位置するものであるから、屈折接辞と考えられる。

さらに、BCCWJ では「た」の活用形として、仮定を表す -tara/-dara がある。また、例示を表す副助詞「たり」-tari/-dari もある。この形も現代日本語としては、これ以上形態素に切り分けることはできないと考えられる。また、形容詞につく場合は、「忙しかったら」isogasi-kattara、「なかったり」na-kattari のようであることから、これらも接続多様性の認められない1形態素で、(16)(17)の屈折接辞の類や -ta/-da あるいは -te/-de と同類と考えられる。やはり、これらも屈折接辞であろう。なお、BCCWJ では「た」の活用形には、-taroo (-daroo) の形があるが、例数が少ない (コア12例) ことから周辺の形として扱っておく。

また、BCCWJ 助詞「つ」「持ちつ」「持たれつ」も12例と少数であることから、位置づけとしては屈折接辞ということになりはするが、周辺形式として扱っておく。

一方、語幹の側をみておくと、「持つ」と同様の屈折接辞をもつ「付く」「読む」など (RC類) は、*mot-, tuk-, yom-* のような通常語幹とともに、*moq-* (語幹末子音 *t, r, w*), *tui-* (同 *k, g*), *yon-* (同 *n, b, m*) のような音便語幹をもち、これらの *-ta/-da* 等、すなわち、屈折接辞 *(i)ta/da* (完了) / *(i)te/de* (継起) / *(i)tarai/dara* (仮定) / *(i)taridari* (例示) をともなう場合は、音便語幹にともなうことになる。⁽³⁸⁾

- (20) <完了> *moq-ta* 持った *oki-ta* 起きた *si-ta* した
 <継起> *moq-te* 持って *oki-te* 起きた *si-te* して

以上、ここまで示してきた現代日本語動詞の活用語尾を整理すると、次の(21)のようになる。() および / は異形態を示す。RC類では【A】が基本語幹に、【B】が音便語幹にく。

- (21) <終止> *-(r)u* (条件) *-(r)eba* (命令) *-e/-ro/-yo* (成立) *-i/ø* (意志) *-(y)oo*
 <打消意志> *-(r)umai* (同時) *-(i)tutu* (禁止) *-(r)una* 【A】
 <完了> *-(i)ta/-da* (継起) *-(i)te/-de* (仮定) *-(i)tarai/dara* (例示) *-(i)taridari* 【B】

6 現代日本語動詞の活用と動詞の諸形態

ここまでみてきたように、現代日本語動詞は語幹に右(21)のような活用語尾をしたがえる形態をもつ。また、語幹の後に次の(22)のような派生接辞をしたがえ、語幹とともに派生語幹となり、派生用言を形成する(このうち、(22) a b は(15)の再掲)。(22) a は動詞的派生語幹、(22) b は形容詞的派生語幹、(22) c は特殊な派生語幹となる。

- (22) a *(s)ase-ru* (使役) *tagar-u* (希望) *hinuu-u* (完了) *tyau-u* (完了) *tek-u* (移動) *terasyyar-u* (尊敬) *te-ru* (継続) *tok-u* (設置) *mas-u* (丁寧) *yagar-u* (卑属) *(r)are-ru* (受身) *r-i* (完了)
 b *ta-i* (希望) *na-i* (打消) *be-si* (義務)

c
(n-z)(v) / n-u(v) (打消)⁽³⁹⁾

以上を表の形で整理すると、次の「表11」のようになる。派生語幹の部分には代表的なものを掲げ、派生語幹とそれにもなう屈折接辞のうち〈終止〉をつけて示すことにする。また、表中網掛部分は、別語幹につくためその箇所は存在しないことを表す。

7 このでの議論の位置

ここまで、現代日本語動詞の活用体系、および動詞形態の概略について、その認め方の手続きを検討しながら、個々の形式を具体的に整理した。実は、形態的な整理の手続きを一定程度示しながら、現代日本語の動詞形態を記述した議論には、先にもふれたようにハイコ・ナロク、江畑冬生の議論があった。⁽⁴⁰⁾ それらの議論における動詞形態記述の帰結を「表12」(ナロク)・「表13」(江畑)にまとめる。さらに、この「表12」「表13」における活用(屈折接辞)の部分をここでの議論と対照したものが、次の「表14」になる。

この「表14」によれば、ハイコ・ナロクの記述結果には、ここでの〈成立〉と、〈打消意志〉 $-(r)umai$ 、〈同時〉 $-(i)tutu$ 、〈禁止〉 $-(r)uma$ が活用形とは認められておらず、また、ここで派生接辞と認めた $-(a)zu$ が活用形と認められているが、多くの場合、ここでの議論と同様な扱いとなっていることがわかる。また、江畑冬生の議論は、〈同時〉 $-(i)tutu$ が活用形と認められていない点や、 $-(a)zu$ 、 $-naide$ を活用形と認めている点をのぞけば、ここでの議論とほぼ一致している。さらにいえば、ここでの議論とナロク、江畑とが異なる点は、一定程度の検討が必要で、議論のわかれる可能性が皆無とはいえない箇所⁽⁴¹⁾ということもできる。このようにみると、これらの3議論の活用についての帰結は——検討の手続きにおいて若干の異なりがあるものであるとはいえるもの——ほぼ妥当なものと考えられるのではないか。

ところで、ここでの議論の最初に、寺村秀夫が活用の整理について示唆するところにふれたが、それは、「現代の日本語の活用のさまを虚心に見てそれを形の上で整理しようとするならば、その結果には大きな差がないはず」というものであった。この3議

(屈折接辞)						派生語幹 (派生接辞)							
同時	禁止	完了	継起	仮定	例示	継続動詞語幹	設置動詞語幹	丁寧動詞語幹	卑属動詞語幹	受身動詞語幹	希望形容詞語幹	打消形容詞語幹	打消特殊語幹
itutu	una							imas-u	iyagar-u	are-ru	ita-i	ana-i	az-u/an-u
itutu	una	ita	ite	itara	itari	ite-ru	tok-u	imas-u	iyagar-u	are-ru	ita-i	ana-i	az-u/an-u
		ta	te	tara	tari	te-ru	tok-u						
		da	de	dara	dari	de-ru	dok-u						
tutu	runa	ta	te	tara	tari	te-ru	tok-u	mas-u	yagar-u	rare-ru	ta-i	na-i	z-u/n-u
	runa												
										rare-ru		na-i	z-u/n-u
tutu		ta	te	tara	tari	te-ru	tok-u	mas-u	yagar-u		ta-i		
	runa												
tutu		ta	te	tara	tari	te-ru	tok-u	mas-u	yagar-u		ta-i	na-i	
													z-u/n-u
										re-ru			

表 13 江畑冬生の動詞活用体系

語幹	動詞を派生	動詞以外を派生	屈折接辞
kak- mi-	-(s)ase -(r)are -(r)e	—	主節 / 連体節 : -(r)u, -ta
			主節 : -e/-ro, -(r)una, -(y)oo, -(u)mai
			主節 / 連用節 : -te, -naide
			連用節 : -∅, -zu, -tara, -tari, -(r)eba
		-na, -ta, -yasu, -niku	-i (形容詞と同様)
-soo	-da (形容動詞と同様)		
-∅, -tsutsu, -nagara, -kata, -te	—		

表 11 現代日本語動詞活用体系・動詞形態

活用種類	語幹種	行・段	語例	語幹	活用語尾							
					終止	条件	命令	成立	意志	打消意志		
動詞	正格活用	子音語幹 RC	通常語幹	サ以外	持つ	mot-	u	eba	e	i ₁	oo	umai
				サ	話す	hanas-	u	eba	e	i ₁	oo	umai
			音便語幹	カ・ガ	付く	tui-						
			タ・ラ・ワ	行う	okonaq-							
			ナ・バ・マ	読む	yon-							
		母音語幹 RV		エ段	考える	kangae-	ru	reba	ro/yo	∅	yoo	mai/rumai
			イ段	起きる	oki-							
		変格活用	カ変 IK	基本語幹			ku-	ru	reba			rumai
	未然語幹				来る	ko-			i ₂		yoo	
	成立語幹					ki-				∅		rumai
		サ変 IS		基本語幹			su-	ru	reba			rumai
第二語幹				する	si-			ro	∅	yoo	mai	
未然語幹					se-			yo				
態語幹					sa-							

表 12 ハイコ・ナロクの動詞活用体系・動詞形態表

1. 活用語尾 ・(r)u (非過去)、・(r)eba (条件)、・(y)oo (意志・推量)、・e、・ro、・yo (命令)、 ・(a)zu (否定) ・Te (接続)、・Ta (過去)、・Tara/・Taraba (条件)、・Tari (例示)
2. 活用語幹を形成する派生接辞 2a 動詞語幹を派生するもの
2a.1 語幹に接続するもの . (r)are:ru (受身・可能等)、.(r)e:ru (可能)、.(s)sase:ru (使役)、.(s)as:u (使役) . (a)n:u (否定)
2a.2 語基に接続するもの . mas:u (丁寧)、. yagar:u (軽蔑)、. u:ru/e:ru (可能)、. kaner:u (不可能)
2b 形容詞語幹を派生するもの . (a)na:i (否定)、. ta:i (願望)

表 14 ナロク・江畑の活用体系との対照

	ナロク	江畑
-(r)u 〈終止〉	○	○
-(r)eba 〈条件〉	○	○
-e/-ro/-yo 〈命令〉	○	●
-i/-ø 〈成立〉	-	○
-(y)oo 〈意志〉	○	○
-(r)umai 〈打消意志〉	-	○
-(i)tutu 〈同時〉	-	派生
-(r)una 〈禁止〉	-	○
-(i)ta/-da 〈完了〉	○	○
-(i)te/-de 〈継起〉	○	○
-(i)tara/-dara 〈假定〉	○	○
-(i)tari/-dari 〈例示〉	○	○
派生	-(a)zu	-zu
-	-	-naide

●……yo なし

論の帰結から考えるに、寺村のいう「虚心に見てそれを形の上で整理する」とは、いわばこの3議論のようなものであって、その結果として、「結果には大きな差がない」ということになるもののではないか。つまり、現代日本語動詞の活用記述にはさまざまな議論があるとはいえ、ここで示したあたりが、形の上で「虚心に」みた記述、ということになるのではないかと思われるのである。

と同時に、動詞形態の整理という点からみたとき、ここで示した派生接辞の主なもの、派生用言の語幹を形成するものであるということも、おおむね共通するところということができるように思われる。ただ、基本的なところは同様とはいっても、周辺部分になると記述の方針によって差が出てくると考えられる。ここでの議論のように、コーパスを使って一定程度の量をもって実現している形式はとりあげていくという方針をとれば、派生接辞を比較的多く認めることになるし、一方、内省などで非規範的な形式は、まずはとりあげるのを控えるという立場をとるとすれば、認められる派生接辞はいきおい少なくなることになる。それは、ナロク・江畑の掲げる派生接辞をここでのものと比べた「表15」をみれば明らかであろう。ナロクは *te-nu* のような話しことばで頻用されるような縮約形を「話しことばにおいて統語的構成体から接尾辞に移行しつつあり、生産的に多くの動詞に後接するアスペクト形式」として掲げてはいるものの、*te-nu*、*to-re-nu* のような一般に積極的にアスペクト形式とはしないようなものには言及していない。もちろん、これらは *nu-nu* に準ずるようなものであるもので、「表15」ではそのような扱いのものと考えたが、それを含めなければ、かなりのものが認められていない。内省による江畑の議論も、やはりそういうものは、まずは認めていない。このような点は、ここでの議論と大きく異なるところであるといつてよい。ただ、もとよりこれは、現代日本語のヴァリエーションをどこまで含めて記述するかということにかかわるところであって、諸形式の形態論的なステータスの認め方が異なっているということではないということ

表 15 ナロク・江畑の派生接辞記述との対照

	ナロク	江畑	
動詞系	(s)ase-ru (使役)	○	○
	tagar-u (希望)	-	-
	timaw-u (完了)	□	-
	tyaw-u (完了)	□	-
	tek-u (移動)	-*	-
	teraqsyar-u (尊敬)	-*	-
	te-ru (継続)	□	-
	tok-u (設置)	-*	-
	mas-u (丁寧)	○	-
	yagar-u (卑属)	○	-
	(r)are-ru (受身)	○	○
	r-i (完了)	-	-
	-	.(s)as-u (使役)	-
	-	.(r)e-ru (可能)	○
	-	.u-ru/.e-ru (可能)	-
-	.kaner-u (不可能)	-	
形容詞系	ta-i (希望)	○	○
	na-i (打消)	○	○
	be-si (義務)	-	-
	-	-	-yasu-i
	-	-	-niku-i
その他	(a)z-u/ (a)n-u (打消)	△	活用
	-	-	-soo-da
	-	-	-nagara
	-	-	-kata
	-	-	-te

□…接尾辞に移行しつつある
 *…言及はないが、□に準ずる
 △…zは活用、nは○

には、留意しておくべきであろう。そういう点で、ここでの議論は、現代日本語の書きことば口語体の記述、それも BCCWJ を資料にしたものであるということが前提であるということ忘れてはならないということである。

8 おわりに

以上のように、記述の方針・具体的手続きを示しながら、現代日本語の動詞活用を中心とした動詞形態を記述してきたが、これは当然のことながら動詞にかぎった議論なのであって、形態分析が必要なものは形容詞はいままでもないところであるし、また、ここで屈折接辞をしたがえる派生接辞を扱ったが、それらも含めて、動詞以外の形式の形態記述が必要になってくる。さらに、それを精緻にすすめたところで、あらためて動詞形態を精査し直す必要がある可能性もあろう。が、それらについては、今後の検討にゆだねるほかはない。

注

- (1) 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版一九八四41頁。
- (2) 寺村秀夫注1。前掲書、第4章。
- (3) もっとも、教育上で古典文法導入のための前段階ということであれば意味はある。なお、本論における手続きにしたがって古代語動詞の分析をすすめると、おおむね学校文法的な体系が導き出される。大木一夫「古代日本語動詞の活用体系—古代日本語動詞形態論・試論—」『東北大学文学研究科研究年報』59二〇一〇。
- (4) たとえば、奥村三雄はおおむね学校文法流の枠組を示すが、終止形と同形である連体形を排し、また、「起キレバ」のうちの「バ」は他とも結びつく共通要素であるが、残りの「起キレ」は「バ」としか結びつかないので「起キレバ」で一語とみなし、仮定形とするというような処置をおこなう。また、語幹も切り出しておらず、結果、寺村(ii)(iii)の批判がかわされていることになり、同時に形態の網羅性も保たれている。奥村三雄「方言の動詞—活用体系の面を中心に—」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法2 用言編(一) 動詞』明治書院一九八四。
- (5) この「表1」は、『現代語法新説』のもの。三上章は『現代語法序説』『文法小論集』などでも動詞活用に言及するが、枠組はほぼ変わらない。この点は、益岡隆志「動詞の活用をめぐって」『日本語文法の諸相』くろしお出版二〇〇〇も参照。三上章『現代語法新説』刀江書院一九五五(くろしお出版復刊一九七二)、三上章『現代語法序説』シンタクスの試み』刀江書院一九五三(くろしお出版復刊一九七二)、三上章『文法小論集』くろしお出版一九七〇。
- (6) 三上章注5前掲書『現代語法序説 シンタクスの試み』156頁。
- (7) 阪倉篤義「日本語の活用—動詞の活用を中心に—」岩淵悦太郎他編『現代国語学Ⅱ ことばの体系』筑摩書房一九五七。
- (8) 芳賀綏『日本文法教室』東京堂一九六二など。
- (9) 松下大三郎『標準日本口語法』中文館書店一九三〇、第四章第十二節。
- (10) 三上章注5前掲書『現代語法序説 シンタクスの試み』159頁。
- (11) 渡辺実『国語構文論』塙書房一九七一、第九節。
- (12) 高橋太郎『動詞九章』ひつじ書房二〇〇三、第2章。他に、鈴木重幸「動詞の活用形・活用表をめぐって」言語学研究会編『ことばの科学2』むぎ書房一九八九、鈴木重幸「形態論・序説」むぎ書房一九九六や奥田靖雄の議論などもある。仁田義雄はこの枠組に近い立場をとる。仁田義雄「語と語形と活用形」三原健一・仁田義雄編『活用論の前線』くろしお出版二〇一二。
- (13) 寺村秀夫注1前掲書42頁、44、45頁。
- (14) ハイコ・ナロク「日本語動詞の活用体系」『日本語科学』4一九九八、江畑冬生「統語法から見た日本語動詞の活用体系」『人文科学研究』133二〇一三。

なお、金田一春彦による動詞語形変化の記述は、この時期における記述としては、かなり注目すべきもののように見える。ただ、そのような帰結にいたるまでの手続きは示していない。市河三喜・服部四郎編『世界言語概説下』研究社一九五五の「日本語」の「Ⅲ. 文法」における「5. 動詞」。

- (15) 野田尚史「動詞の活用論から述語の構造論へ―日本語を例とした拡大活用論の提案―」三原健一・仁田義雄編『活用論の前後』くろしお出版二〇二二など。
この考え方は、次の議論も同様。大木一夫注3前掲論文。また、大木一夫「中世後期日本語動詞形態小見」青木博史・小柳智一・吉田永弘編『日本語文法史研究4』ひつじ書房二〇一八。
- (16) 大木一夫注3前掲論文。文法概念をいたずらに拡張することの問題は、大木一夫『文論序説』ひつじ書房二〇一七のXも参照されたい。
- (17) ここでの定義は、基本的に、田中春美他編『現代言語学辞典』成美堂一九八八による。
- (18) L・J・ウエイリー『言語類型論入門 言語の普遍性と多様性』（大堀寿夫他訳）岩波書店二〇〇六。ハイコ・ナロク注14前掲論文もほぼ同様の基準を掲げており、ある程度一般的と考えられる。
- (19) 服部四郎「附属語と附属形式」『言語研究』15一九五〇（服部四郎『言語学の方法』岩波書店一九六〇所収）。
- (20) 宮岡伯人『語』とは何かエスキモ―語から日本語をみる』三省堂二〇〇二。倚辞・接語を認める傾向は近年は強くなってきている。名称は別にしても、ハイコ・ナロク注14前掲論文も、そのような語を認めている。また、非自立的な形態素の認定については、江畑冬生「形態素タイプの認定―日本語動詞における屈折を例に―」『エドワード・サビア協会研究年報』28二〇一四も参照。
- (21) 国立国語研究所『現代日本語書と言葉均衡コーパス』https://jrninja.ac.jp/corpus_center/bccwj/（中納言2.4データバージョン1.1, 2018）。BCWJは原則としてコアデータを用いる（動詞136,192例にもとづく）。非コアデータを用いる場合は、例文を自視で確認し、非コアデータ利用の旨を注記する。
- (22) 他に、「に」の場合を考えれば、「食うに困る」「生きるには欠かせない」のような動詞後接のものがあると同時に「砂の奥底深くに咬い込まれ」のような形容詞後接のもの、「私に任せてください」「毎週土曜日に」のような名詞後接のものがあり、やはり、服部原則Iをみたく附属語である。
- (23) BCCWJの動詞後接の「だ」は「だろう、であろう、なら、じゃない」のようなもの、「です」は「〜でしょう」の形である。これを、「(本)だ」「(本)です」等と同じ語と認めるかという点では検討の余地があるが、「問題だろう」「問題なら」や、(9)bのような形があることからすれば、いずれにしても動詞の一部ではないことになる。
- (24) この〈助動詞〉は、学校文法やBCCWJの「助動詞」とは概念が異なるにもかかわらず同名であって、その点で問題であるともいえるが、その一方で、比較的常識的な命名であり、大木一夫注3前掲論文等でもこのような名称で呼んだこともあることから、ここでもそれにしておく。〈助動詞〉も同様。「表9」の●は、非コアデータの例である。「どんなに早くたつて夜七時半くらいからスタートし、」のような例。142例ある。
- (25) 見出しは「けれど」ではあるが、ここには「けど」も含んでいる。「けれど」「けど」のいずれでも語である。
- (26) 「ながら」の並行的な事態を表す用法を別にする、それは動詞のみに接続することになり、附属形式として扱うことになる。江畑冬生は派生接辞の扱いである。江畑冬生注14前掲論文。
- (27) ここでの形態素の示し方は便宜的なものである。精確な分析は後述。
- (28) 他に例数が比較的少ないものには、「ちまう」「やがる」のような単属的なもの、「てく、とく」のような話しことばでは普通にみられるが、書きことばでの使用が回避されることの多い文体的に低い形式がある。
- (29) (15)aの *lenasoyar-n* の *o* は、促音を表す。以下、同じ。
- (30) (16)中の*は、非コアデータによるものである。たとえば、*o:ho*の形が実際に見いだされるのは、非コアデータによるということである。もちろん、こ

の類の動詞全体では、コアデータ内に「*o*」をもつものがあるのはいうまでもない。以下、同様。

(33) (17)は「するな」以外は、非コアデータにもとづく。

(34) あるいは、形容詞の場合にみられる *kar* を派生接辞と考えることもできそうである。そのみかたをとる場合、「*kar*」は、打消特殊接辞接続のための特殊派生接辞と考えることになるだろうが、その接辞の機能ははっきりせず、ここでは、まずは避けておく。*kar* を切り出すとすると、文語的ではあるが「べし」に *be-kar-a-zu* にもみられることになるのであるが、ハイコ・ナロク注14前掲論文参照。

(35) (18)の*は非コアデータによる。なお[BCCWJ]には「国益は考えにやいけません。」の「にや」を「ず」の活用形と認めているが、ここでは「考えなければ」の変種と考える。もつとも、この形は非コアデータに5例あるだけであるから、「ず」の一端だとしても、周辺のなものである。

(36) 「行く」は語幹末子音が *k* であるが、*o* 末の音便語幹になる。

(37) 子音語幹動詞のうち、「話す」などの語幹末がサ行になるものは、音便語幹をもたない。*ta* 等は次のような異形態になる。 *hanas-ta* (〈完〉)、*hanas-ite* (〈継起〉)、*hanas-itari* (〈仮定〉)、*hanas-itari* (〈例示〉)。

(38) (a) *zu* は、*u* の他に、*aru* の屈折接辞を、(a) *ru* は、*u* の他に「*o*」の屈折接辞をとまなうものと考ええる。

(39) ハイコ・ナロク、江畑冬生注14前掲論文。

(40) 江畑冬生は、「否定の関わる4つの形態素 (*zu*, *naide*, *(u)una*, *(u)nan*) が先行研究の活用表から欠落する傾向にある」として、B. Block、寺村秀夫、益岡隆志・田窪行則、ハイコ・ナロク、角田三枝の議論を「一覧表にして示している。江畑冬生注14前掲論文。Block, B. "Studies in colloquial Japanese I Inflection." *Journal of the American oriental society*, 66-2: 194-6. 寺村秀夫注1前掲書。益岡隆志・田窪行則『基礎日本語文法改訂版』くろしお出版一九九二、ハイコ・ナロク注14前掲論文。角田三枝「日本語の動詞の活用表」『立正大学国語国文』45: 200-7。

An Analysis of Verb Inflection in Modern Japanese

Ooki Kazuo

Teramura Hideo, one of the scholars who led the debate on Japanese grammar in the late 20th century, famously said, “Even if we were to distance ourselves from the prescriptive notions of Classical Japanese grammar and analyze Modern Japanese verb inflection based on a purely open-minded structural analysis, the results of our analysis would be largely similar to what we already have.” The results of the various analyses of Modern Japanese verb inflection by contemporary scholars, however, yield substantial differences that cannot be simply overlooked. Thus, what was the true intention of Teramura’s statement?

In this paper, with respect to Teramura’s statement, I provide a novel analysis of Modern Japanese (the written vernacular) verb morphology and an inflectional paradigm thereof, while clarifying each step of my analysis. The results of my analysis, in the words of Teramura, could largely be said to represent an “open-minded” description of Modern Japanese verb inflection.